

演題 39. 検体中のさまざまな要因が測定値に与える影響 その2 抗凝固剤について

○長谷健二 丸山千恵子 木村豊 佐藤一弘(帝京大学  
ちば総合医療センター) 吉田俊彦 (千葉大学医学部  
附属病院)

【目的】検査測定値に影響を与える事例として、採血時、プレーン採血管(以下プレーン管)への抗凝固剤入り血液の混入が挙げられる。今回は抗凝固剤 EDTA(以下 EDTA)がプレーン管採取血液の測定値へ及ぼす影響について若干の知見を得たので報告する。

【対象と方法】①プレーン管採取血液に、EDTA-2K 採血管(以下 EDTA 管)採取血液を人工的に混入させ、影響の程度をみるため生化学の一般的な項目について測定値を確認した。②採血順序による影響を確認するため、EDTA 管の前後にプレーン管を採取、分注した場合の測定値を①と同様な項目について比較した。③生化学項目よりも高感度な腫瘍マーカー項目で、注射針による持ち越し確認を行った。

【結果および考察】①500 $\mu$ l 混入させたところ、Ca(MXB 法で約 20%減少)、Mg(酵素法で約 40%減少)、K(電極希釈法で約 20%増加)の測定値が変化を示し、EDTA 血混入の影響を受けたと考えられた。②方法①で影響を受けたと考えられた 3 項目でも相対値の平均は、Ca99.4~100.7%、Mg98.6~101.8%、K99.2~100.4%を示し、管理血清の日間精度管理における変動内であったことから、他の生化学項目同様に採血順による測定値への影響はないと考えられた。③指標とする C. O. I. に変化が認められ、注射針による次検体への持ち越しの事実が確認された。

【まとめ】今実験において採血時に注射針へ付着した検体による次検体への持ち越しの事実は確認されたが、採血順序による EDTA 混入の生化学項目測定値への影響はないと思われた。EDTA により測定値へ直接影響を受ける項目では、ある程度大量に EDTA 血の人工的な混入がなければ、プレーン管の測定値への影響は認められないと考えられた。

連絡先 0436-62-1211 (内) 1175